

人間行動学科 地理学コース

尾道三部作が創り出す場所へのイメージ
—イメージの形成とその影響—

学部 文学部

卒業年度 平成30年度

学籍番号 A15LA060

佐藤^{さとう} 璃奈^{りな}

平成 30 年度提出卒業論文

尾道三部作が創り出す場所へのイメージ
— イメージの形成とその影響 —

A15LA060 佐藤璃奈

目次

I はじめに

II 尾道と映画

- 1) シネマツアーリズムの変遷
- 2) 尾道市の沿革と「映画の街」の変遷
- 3) 尾道三部作

III 朝日新聞における「尾道」

- 1) 新聞の記事数
- 2) 内容の変化
 - i ピークごとの記事の内容
 - ii 記事中の表現
- 3) 尾道のイメージ形成と維持

IV 「尾道三部作」がもたらした変化と今

- 1) 観光
- 2) FC
- 3) 「尾道三部作」公開後から現在までの変化

V おわりに

キーワード

尾道，映画，観光，尾道三部作，シネマツアーリズム，FC

I はじめに

旅行者の数は年々増加傾向にあり，観光庁の調査によると，2017年の日本人国内延べ旅行者数はおよそ6億4千万人（前年比約6%増）となり，うち宿泊旅行がおよそ3億2千万人（前年比約4%増），日帰り旅行がおよそ3億1千万人（前年比約8%増）となった（官公庁，2017）。また旅行者数の増加に伴い，旅行者のニーズも多様化している。観光庁は観光立国の実現に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図ることを目的として，2006年12月に観光立国推進基本法を制定し，地域独自の魅力を活かした体験型・交流型観光を「ニューツーリズム」と定義づけた（観光庁，2010a）。「ニューツーリズム」には，エコツーリズムやグリーンツーリズム，文化観光，産業観光，ヘルスツーリズム，フィルムツーリズムなどが含まれる。これらのツーリズムのうち本稿では，近年，アニメの舞台となった地を巡る観光形態で注目されている「聖地巡礼」を含む，フィルムツーリズムを扱う。

安田（2015）は，小説・映画・テレビドラマ・マンガ・アニメ・ゲーム・音楽・絵画などの作品に興味を抱いて，その作品に登場する舞台，作者ゆかりの地域を訪れる旅は「コンテンツツーリズム」と総称されていると述べている。特にその作品を映像作品に限定したものがフィルムツーリズムと呼ばれることが多いという。さらにフィルムツーリズムには明確な定義がなく，スクリーンツーリズムやロケーションツーリズム，シネマツーリズムなどと呼ばれることもあると述べている。観光庁（2010b）は「スクリーンツーリズム促進プロジェクト」において，

「スクリーンツーリズムとは、映画・ドラマ等の映像作品に関心を持つ人々が、当該映像作品の視聴、もしくは作品に関する情報との接触をきっかけとして、映像作品の制作現場となった地域に来訪すること」と定義している。また筒井（2013）は、「フィルムツーリズムとは、映画やテレビ番組の舞台となったロケ地、原作の舞台を巡る旅行形態」（p.12）としており、スクリーンツーリズムと同義と捉えられる。さらに木村（2010）は、「映画を鑑賞したオーディエンスが、その作品に関する場所を訪れる観光現象」（p.113）としている。そこで本稿では、様々なコンテンツ作品を対象とした大きい括弧を「コンテンツツーリズム」と捉え、「フィルムツーリズム」を映画・ドラマ等の映像作品の舞台となったロケ地、原作の舞台を巡る旅行形態、「シネマツーリズム」は、作品を劇場で公開された映画のみに限定し、その舞台となったロケ地、原作の舞台を巡る旅行形態と定義する。

日本では歌枕への旅や、海外では著名な文学作品の舞台となった地を訪れるという旅行形態は古代から行われていたが、映画の発達とともにシネマツーリズムという概念が生まれた。それが顕在化したのは、1953年にアメリカで制作・公開され、世界的大ヒット作となった『ローマの休日』からである（安田，2015）。映画では、テレビの泉やスペイン広場、パンテオン、コロッセオ、真実の口、サンタジェロ城、ヴェネツィア広場など、ローマの有名な観光地が多く登場しており、現在でも映画のロケ地を巡るツアーが行われている。日本において邦画によるシネマツーリズムの萌芽となる作品は、1954年に公開された木下恵介監督の『二十四の瞳』であると

言われており、その後シネマツアーリズムを日本に広めた作品が、1980年代に公開された大林宣彦監督（以下、大林監督）の「尾道三部作」である（安田、2015）。「尾道三部作」とは、大林監督が故郷である尾道を舞台に撮影した『転校生』（1982年公開）、『時をかける少女』（1983年公開）、『さびしんぼう』（1985年公開）の三作品を指す。尾道はそれ以前から「坂の街」や「文学の街」として有名な観光地であったが、作品の中では観光スポットには焦点を当てず、昔ながらの風景を映し出した。これらの作品が多く、熱狂的なファンを生み出し、ロケ地巡りの旅行者を増加させた。

これまでの研究で、和田（2017）が「映画の街＝尾道」というイメージの認知度と尾道での観光行動からロケ地観光の持続可能性について論じている。和田は、尾道が「映画の街」と呼ばれるようになったのは、尾道で撮影が行われた『東京物語』と「尾道三部作」を中心とする大林監督の作品の影響が大きいと述べているが、抽象的な表現にとどまっており、そのイメージが生み出された具体的な時期などについては明らかになっていない。そのため本稿では、「尾道三部作」がいつ、どのようにして尾道に「映画の街」というイメージを与え、全国にシネマツアーリズムを波及させていったのか、朝日新聞の記事数の推移及び内容から明らかにしていく。また、イメージの形成が尾道の観光とフィルムコミッションにおいてどのような影響を及ぼし、現在に至るまでどのように変化してきたのか考察することで、イメージの形成が実際の取り組みとどのように関係しているのかについても明らかにする。

II 尾道と映画

1) シネマツーリズムの変遷

シネマツーリズムの始まりは映画の誕生以降であり、さらに撮影所内での撮影ではなく、ロケーション撮影が始まってからである。ロケーション撮影とは、映画やテレビドラマの撮影において、実在の風景や場所、建物などを利用し、機材などを撮影現場に持ち出して行う撮影のことを指す。

映画の誕生は、1895年に「シネマトグラフ¹⁾」を発明したフランスのリュミエール兄弟が、国立工場奨励協会の本部で『工場の出口』という作品を上映した時である。熱烈な拍手で再三上映が中断されるほど、人々は初めて見るスクリーンに映し出される映像に興奮したと言われている（永治、1992）。

1900年代に入るとストーリー性のある長編映画の制作も始まり、アメリカをはじめとして本格的な映画館が登場した。また、本格的に物語性のある映画『大列車強盗』が1903年、アメリカでエドウィン・ポーター監督によって制作・公開された。上映時間が12分であるこの映画は、カットバックやパン撮影といった新たな映画技術が使われていたが、この時期にはすでにロケーション撮影が取り入れられている。同監督がこの映画の前に作成した『あるアメリカ消防夫の生活』（1903）という映画の中では、短時間だがロケーション撮影を行っていた。したがって、ロケーション撮影の始まりは明らかになっていないが、この頃にロケーション撮影が導入され

たと考えられる（安田，2015）。

日本では1896年にエジソンのキネトスコープ²⁾が輸入され，神戸の神港倶楽部で公開された。これが日本での映画の歴史の始まりである。邦画の制作は1899年に始められ，1908年に吉沢商店が制作した『己が罪』で日本初のロケーション撮影が行われた。吉沢商店は東京の目黒駅前に，日本初の映画撮影所となる「吉沢商店目黒行人坂撮影所」を持っていたが，観客に実景を珍しがられたことから海や山で撮影を行ったと言われている（安田）。

先述したように，シネマツーリズムが顕在化したのは『ローマの休日』の登場からである。オードリー・ヘップバーンが演じるある国の王女アンと，グレゴリー・ペックが演じるアメリカ人の新聞記者であるジョー・ブラッドレーがローマで繰り広げる，短く切ないロマンティック・コメディである。映画が公開された1953年は，第二次世界大戦が終わって10年が経ち，欧米の先進諸国においてマスツーリズムが花開き始めたころである。手島（2008）によると，マスツーリズムとはもともと富裕階級のみが享受できた観光が，大衆の経済力の向上や旅行の商品化の進展によって大衆に普及していった観光の大衆化であり，大量の観光者が発生する現象のことを指しており，多くの人々がローマを目指すようになった。

邦画によるシネマツーリズムの原点となった作品は，第I章の第1節で述べたように，『二十四の瞳』（1954）である。日本が第二次世界大戦に突入する時代が背景となっており，小さな島で生きる女性教師と生徒たちの苦

難と悲劇を通して、戦争の悲惨さを描いている。この映画の舞台となったのは「小豆島」であり、小豆島の玄関口となる土庄港では、女性教師と12人の生徒から成る「平和の群像」が置かれている。また、1987年に公開されたリメイク版『二十四の瞳』の撮影時のオープンセットを活用した、「二十四の瞳映画村」には、今もなお旅行者が訪れている。

安田によると、1970年代から1980年代にかけて、ハリウッド映画は全盛期を迎えており、洋画の名作やヒット作が数多く作られた。1965年に公開されたロバート・ワイズ監督のミュージカル映画、『サウンド・オブ・ミュージック』は世界的に大ヒットしたが、特にアルプスの大自然に人々が魅了され、1970年代の日本人の海外旅行の行き先として定着した。そのほかにも、『オリエンタル急行殺人事件』（1974）や『ビバリーヒルズ・コップ』（1984）、『スタンド・バイ・ミー』（1986）など、ひとつの町でのロケーションで構成された大ヒット作品が、その地に対する好イメージを生み出し、旅行者を誘引してきた。一方、邦画は低迷期と言われていたが、この時期に日本においてシネマツアーリズムの記念碑的作品となる作品、「尾道三部作」が公開された。

その後1990年代から2000年代にかけては、シネマツアーリズムが拡大した時代である。洋画では、『プリティ・ウーマン』（1990）や「ハリー・ポッターシリーズ」、『ロード・オブ・ザ・リング』（2001）などが公開された。邦画では『Love Letter』（1995）や『下妻物語』（2004）、『世界の中心で愛を叫ぶ』（2004）などが公開された。『Love Letter』は韓国でも大ヒットし、韓国での観客

動員数が数百万人を記録した。そのため、舞台となった小樽には日本人だけでなく韓国人旅行者が大勢押し掛けた。

全国フィルム・コミッション連結協議会（2009）によると、フィルムコミッション（以下、FC）とは「映画、テレビドラマ、CMなどのあらゆるジャンルのロケーション撮影を誘致し、実際のロケをスムーズに進めるための非営利公的機関」のことであるが、1990年代から2000年代にはFCの活動が注目され、複数のヒット作を生み出し、多くの旅行者誘因に成功してきた。また、事前に企画されたフィルムツーリズムという形態が顕在化した時期でもある。さらに、邦画がインバウンド、海外旅行を誘引したり、海外制作の日本ロケ映画がインバウンドを促進したりといった現象が起こった（安田，2015）。

2) 尾道市の沿革と「映画の街」としての変遷

尾道市は広島県南東部に位置しており、面積は285.11 km²、人口137,792人（2018年10月30日現在）の都市である。

中世より交通の要衝であった尾道は、平安時代に後白河法皇の所領地備後国大田庄の年貢積出の公認港となった。江戸時代には北海道－大阪を結ぶ大型船「北前船」の寄港も始まった。その繁栄ぶりは「北前船が寄港すると町がひっくり返るような賑わいを見せた」とも言われている（尾道観光協会ウェブサイト）。さらにその繁栄によって尾道の多くの商人が豪商となり、彼らは有する財を寺社の建立や町の整備などに投資した。その寺社や町並みは現在でも数多く残り、国・県・市指定文化財は

360 件，登録文化財は 33 件と，近隣の地域にはみられないほど数多くの文化財を抱えている（西井，2016）。

また，尾道の海を望む階段や坂道，路地越しに見える尾道水道，点在する寺院など，歴史を凝縮した景観に魅かれ，志賀直哉や林芙美子，小林和作など多くの文人墨客が足跡を刻んできた。そのため，「文学の街」「坂の街」，さらに多くの映画作品の舞台になっていることから「映画の街」としても知られるようになったと言われている（和田，2017）。

尾道で撮影された映画は主に 40 作品以上あり（表 1），特に尾道に「映画の街」というイメージを与える要因となった作品は，小津安二郎監督（以下，小津監督）の『東京物語』（1953 年公開）と大林監督の「尾道三部作」であるといわれている（末永，2010）。『東京物語』は尾道と東京を舞台にした作品で，東京に住む成長した子供たちを地方から訪ねた老夫婦の心情が描かれている。「尾道三部作」は，三作品すべてで，大林監督の出身地である尾道市でロケが行われ，地元民との協力によって昔ながらの生活の場である尾道の風景を映し出した。

その後尾道市では「尾道三部作」と「新尾道三部作³⁾」のロケ地マップが作成され，観光案内所等で観光客向けに配布されるようになった。特に「尾道三部作」は多くの熱狂的な支持を集め，尾道の知名度を飛躍的に向上させた。その人気ぶりから，1995 年に大林監督作品のロケ地を紹介するガイドブック『a movie book「尾道」』⁴⁾も出版された。2000 年には，明治時代に倉庫として利用されていた蔵を改装して「おのみち映画資料館」が作られ，小津監督の「東京物語」や広島県出身の新藤兼

人監督らの資料，映画ポスターのほか，実際に映画館で使われていたという映写機などが展示されている。その3年後の2003年に尾道商工会議所と尾道観光協会は，住民の「我がまち」意識の醸成と日本一の「映画のまち」を目指す構成団体となることを目的として，「おのみちフィルムコミッション」を設立した。「おのみちフィルムコミッション」は，映画の誘致・プロモーションやロケハンデータの収集，ロケーション状況の提供，エキストラ募集のサポートなど，尾道での映像作品の撮影を積極的，組織的に支援・誘致するサービスの提供を行っている。その後，東映株式会社が戦後60年という節目に『男たちの大和/YAMATO』の制作を企画し，尾道市にある日立造船向島西工場（現在は閉鎖中）で戦艦大和の原寸大のオープンセットが建設された。映画の撮影が進む中，このロケセットを見学したいという要望が寄せられたため，市や商工会議所，観光協会などで協議した結果，ロケ終了後の2005年7月17日から一般公開を行うことになった。その後およそ一年間にわたって公開され，およそ100万人の観光客が来場し，その経済波及効果は40億円にのぼったと推定されている（尾道市資料⁵⁾）。また2010年から2011年にかけては，NHKの連続テレビ小説『てっぱん』の舞台となった。放送終了後には，ロケセットである「おのみっちゃん」がてっぱん坂のみちしるべで公開された。このほかにも，『てっぱん』で使われた数々の小道具が尾道商業会議所記念館，尾道ええもんや，向島休憩所で展示されたり，尾道観光協会によって観光案内が行われたりした。

このように尾道は映画やドラマなど，数々の映像作品

においてその舞台として活用され、多くの人々が尾道に足を踏み入れている。

表 1 尾道で撮影された主な映画

	公開	タイトル	制作/配給	監督
1	1929	波浮の港	日活	木藤 茂
2	1939	女の教室 学校の巻 七つの仏	東宝	阿部 豊
3	1946	恋三味線	大映	野淵 昶
4	1949	薔薇はなぜ紅い	松竹	大曾根 辰夫
5	1953	東京物語	松竹	小津 安二郎
6	1954	放浪記	東映	久松 静児
7	1954	女の暦	新東宝	久松 静児
8	1957	裸足の娘	日活	阿部 豊
9	1957	集金旅行	松竹	中村 登
10	1958	悲しみは女だけに	大映	新藤 兼人
11	1959	暗夜行路	東宝	豊田 四郎
12	1960	裸の島	近代映画協会	新藤 兼人
13	1962	左ききの狙撃者 東京湾	松竹	野村 芳太郎
14	1962	憎いあんちくしょう	日活	蔵原 性繕
15	1962	ぶらりぶらぶら物語	東宝	松山 善三
16	1962	はだしの花嫁	松竹	番匠 義彰
17	1963	波浮の港	日活	斎藤 武市
18	1964	うず潮	日活	斎藤 武市
19	1965	馬鹿っちょ出船	松竹	桜井 秀雄
20	1969	かげろう	近代映画協会・松竹	新藤 兼人
21	1972	故郷	松竹	山田 洋次
22	1978	お嫁にゆきます	ホリ企画/東宝	西河 克巳
23	1979	神様のくれた赤ん坊	松竹	前田 陽一
24	1982	転校生	日テレ・ATG/松竹	大林 宣彦
25	1983	男はつらいよ 口笛を吹く寅次郎	松竹	山田 洋次
26	1983	時をかける少女	角川春樹事務所/東映	大林 宣彦
27	1985	さびしんぼう	東宝映画・アミューズ/東宝	大林 宣彦
28	1986	幕末青春グラフィティ Ronin 坂本龍馬	東京放送・電通/東宝	河合 義隆
29	1986	落葉樹	丸井工文社、近代映画協会	新藤 兼人
30	1986	野ゆき山ゆき海べゆき	日テレ・バップ/ATG	大林 宣彦
31	1986	日本殉情伝 おかしな二人 ものくるほしきひとびとの群れ	フィルムリンク	大林 宣彦
32	1986	彼のオートバイ、彼女の島	角川春樹事務所/東宝	大林 宣彦
33	1991	ふたり	ギャラク・PSC・NHK	大林 宣彦
34	1992	瀬東奇譚	近代映画協会近代映画協会・ATG	新藤 兼人
35	1995	あした	アミューズ・PSC・プライドワン	大林 宣彦
36	1997	瀬戸内ムーンライト・セレデーナ	松竹・オフィスワントゥワン・フジテレビ	篠田 正浩
37	1999	あの夏の日 ーとんでろじいちゃんー	PSC・プライドワン/東映	大林 宣彦
38	2000	マヌケ先生	中国放送・バンダイビジュアル・PSC/PSC	大林 宣彦
39	2002	八月の幻	キングレコード・ギャガコミュニケーションズ/ギャガコミュニケーションズ	鈴木 浩介
40	2005	ちゃんこ	ドリームワン	サトウトシキ
41	2005	男たちの大和/YAMATO	2005『男たちの大和/YAMATO』製作委員会/東映	佐藤 純彌
42	2007	転校生 さよならあなた	角川映画/日本映画ファン	大林 宣彦
43	2008	石内尋常高等小学校 花は散れども	近代映画協会/シネカノン	新藤 兼人
44	2012	瀬戸内海賊物語	「瀬戸内海賊物語」製作委員会/松竹	大森 研一
45	2013	潔く柔く	「潔く柔く」製作委員会/東宝	新城 毅彦

出典：尾道市資料⁶⁾より筆者作成

3) 尾道三部作

「尾道三部作」の一作目となる『転校生』は1982年に公開された。原作は山中恒の『おれがあいつであいつがおれで』、脚本は剣持亘、監督は大林宣彦、撮影を阪本善尚がそれぞれ担当した(一般社団法人日本映画製作者連盟ウェブサイト「映連データベース」)。主人公である斉藤一夫、斉藤一美をそれぞれ尾美としのり、小林聡美が演じた。一美は転校先のクラスで、昔同じ幼稚園に通っていた一夫と再会した。ある日二人は学校からの帰り道で、寺社の石段を一緒に転げ落ちてしまい、そのはずみで二人の身体と心が入れ替わってしまった、という内容である。主演の小林聡美、尾美としのりは、日本アカデミー賞新人賞を受賞している(日本アカデミー賞ウェブサイト)。

この作品が制作された経緯について『転校生』のプロデューサーである森岡道夫は、脚本家の剣持亘が山中恒の児童文学『おれがあいつであいつがおれで』を森岡のもとへ持ち込み、大林宣彦に監督を依頼して映画をつくらうと言い出したことがきっかけであると述べている(東京国際映画祭, 2013)。当時、薬師丸ひろ子主演の『ねらわれた学園』(1981年公開)を撮り終えた頃だった大林監督のもとへ『転校生』制作の話を持ち掛けたところ、大林監督は大変乗り気で承諾したという。大林監督は、原作を読み終わったときに「これはまさに俺の映画である」(キネマ旬報 1982年4月下旬号, p.1251)と感じたと述べている。

『転校生』は、公開後口コミで評判が広まり、松竹では一年間も上映され、昭和57年のキネマ旬報ベストテ

ンで第3位となった。その後、2007年には大林監督によって『転校生』のリメイク版が制作された。

その翌年に公開された『時をかける少女』は、筒井康隆の小説が原作である。『転校生』同様、脚本を剣持亘、撮影を阪本善尚が担当した（一般社団法人日本映画製作者連盟ウェブサイト「映連データベース」）。広島県の尾道に住む高校生の和子（原田知世）はある日の放課後、化学の実験室を掃除中にラベンダーの香りを嗅いで気絶してしまい、目覚めると時間を跳躍するという能力を持つようになっていた。彼女は転校生である男子の同級生、深町（高柳良一）に魅了されるが、和子に起きた異変の原因は彼にあり、さらに彼の正体は未来からやって来たタイムトラベラーだった、という内容である。

『時をかける少女』は興行収入28億円を記録し、この年の邦画興行収入ランキングでは蔵原惟繕監督の『南極物語』に次いで2位となった（一般社団法人日本映画製作者連盟ウェブサイト「日本映画産業統計」）。また、この作品で主演を務めた原田知世は、第7回日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞した（日本アカデミー賞ウェブサイト）。その後幾度となく実写映像化されてきたが、2006年には細田守監督によってアニメーション映画となり、第30回日本アカデミー賞最優秀アニメーション作品賞を始めとして数々の賞を受賞している（日本アカデミー賞ウェブサイト）。

三作目となる『さびしんぼう』は、1985年に公開された。山中恒の『なんだかへんて子』が原作となっており、脚本は剣持亘、内藤忠司、大林宣彦、撮影は阪本善尚が担当している（一般社団法人日本映画製作者連盟ウ

ェブサイト「映連データベース」)。カメラ好きの高校生だった井上ヒロキ（尾美としのり）は、隣の女子校で放課後になるとショパンの『別れの曲』を弾く少女（富田靖子）に恋心を抱いていた。ヒロキは彼女を勝手に“さびしんぼう”と呼んでいたが、ある日、ピエロのような格好をした“さびしんぼう”と名乗る謎の女の子が現れる、という内容である。『さびしんぼう』は第59回キネマ旬報ベストテン⁷⁾で第5位となった（一般社団法人日本映画製作者連盟ウェブサイト「映連データベース」）。

では、これらの三作品は尾道のイメージ形成や維持においてどのように寄与したのだろうか。次章では、新聞記事の分析を通して、「映画の街」というイメージが形成された過程や要因について明らかにしていく。

Ⅲ 朝日新聞における「尾道」

1) 新聞の記事数

本研究では、世の中の出来事やイメージを反映しているものとして新聞報道に注目するが、特に朝日新聞の記事数やそれぞれの内容を通して、尾道に対するイメージについて考察していく。分析の対象とするのは、朝日新聞が刊行された1879年から2018年に朝日新聞紙上の尾道に関する記事である。まず本節では、尾道と映画や寺、坂について報道している記事の数をみていく。

表2では、「尾道&映画」、「尾道&寺」、「尾道&坂」という2つのキーワードをそれぞれ含んだ記事数を表している。朝日新聞データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』第一群（以下『聞蔵Ⅱ』第一群）は、朝日新聞紙面に掲載さ

れた記事の見出しと本文がテキスト形式で収録されており，朝日新聞本紙（朝刊・夕刊）最終版，朝日新聞地域面，朝日新聞デジタル，AERA，週刊朝日が掲載されている⁸⁾。朝日新聞データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』第二群（以下『聞蔵Ⅱ』第二群）では，「明治・大正」「昭和（戦前）」「昭和（戦後）」「平成（～11年）」の4つの時代において，大阪と東京の本紙および付録・号外などが収録されている⁹⁾。『聞蔵Ⅱ』第二群で「尾道&映画」を含む記事は4件，「尾道&寺」は39件，「尾道&坂」は235件であった。1985年以降の『聞蔵Ⅱ』第一群では，それぞれ1189件，2962件，5133件となっている。

図1は，1985年から2018年にかけて『聞蔵Ⅱ』第一群に掲載された「尾道&映画」というキーワードを含む記事数の推移をグラフにしたものである。1985年から1994年にかけては，記事数が0件から8件と一桁台であったが，1995年に17件の記事が掲載されて以来，1996年に21件，1997年に31件，1998年に37件，1999年に56件と，その数は徐々に増加している。1999年に56件に達してからは，25件から80件の間を推移し，1999年，2002年，2006年，2010年，2015年，2018年の6つのピークを迎えながら増減を繰り返していることが読み取れる。以後の分析では，これら6つのピークの新聞記事を中心に扱う。

表 2 各キーワードを含む記事数

	尾道 & 映画	尾道 & 寺	尾道 & 坂
『聞蔵Ⅱ』第一群	1189	2962	5133
『聞蔵Ⅱ』第二群			
明治・大正	2	27	202
昭和（戦前）	1	10	21
昭和（戦後）	1	2	12
平成（～11年）	0	0	0

出典：1985年から2018年の『聞蔵Ⅱ』第一群，第二群から筆者作成

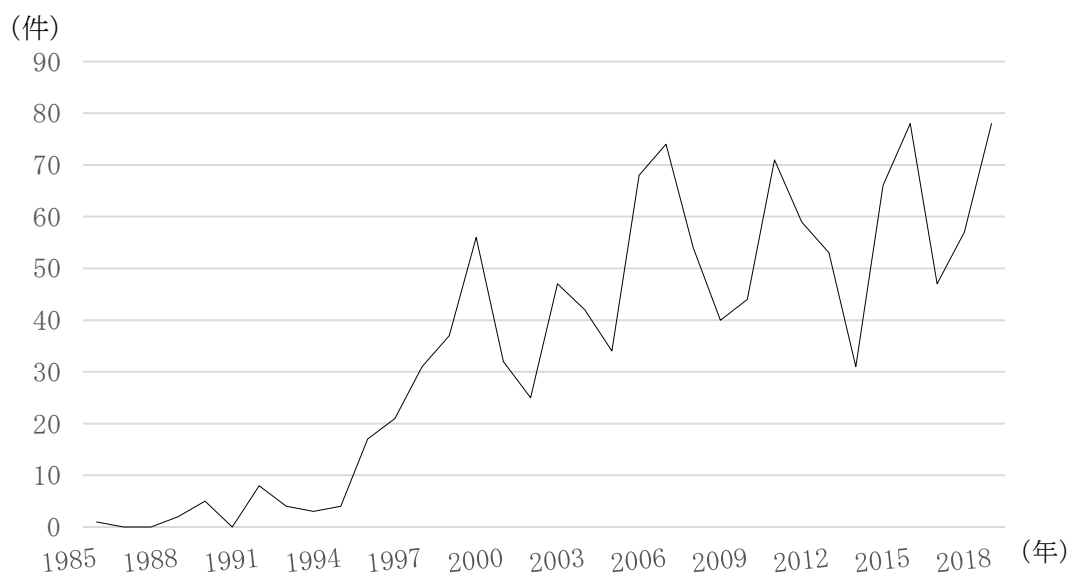


図 1 「尾道」と「映画」を含む記事数の推移

出典：1985年から2018年の『聞蔵Ⅱ』第一群から筆者作成

2) 内容の変化

次に、表 2 における『聞蔵Ⅱ』第一群に掲載されている 1189 件の「尾道」と「映画」を含む記事の内容を詳しくみていく。時代背景をふまえて内容がどのように変化したのか、また、具体的な表現、言い回しがどのように変化したのか検討する。

i ピークごとの記事の内容

前節で述べたように、1985 年から 2018 年にかけての記事数には大きく 6 つのピークがある。それぞれのピークにおける記事数は、1999 年が 56 件、2002 年が 47 件、2006 年が 74 件、2010 年が 71 件、2015 年が 78 件、2018 年が 78 件である。以下では、それぞれのピーク時における記事の内容を見ていく。

1 つ目のピークである 1999 年にはしまなみ海道（西瀬戸自動車道）が開通した。しまなみ海道とは、広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶ、全長約 60km の自動車専用道路である（本州四国連絡高速道路株式会社）。56 件ある記事のうち、尾道三部作や映画、大林監督と関係がある記事は 16 件だったが、そのうちしまなみ海道に関する記事が 8 件みられた。瀬戸内しまなみ海道の本州側の起点橋となる「新尾道大橋」の橋名碑の「新尾道大橋」の文字を大林監督が揮毫したことⁱや、しまなみ海道の本州側の起点となる広島県尾道市の J R 尾道駅前に完

ⁱ 朝日新聞 1999 年 4 月 25 日朝刊高知面，朝日新聞 1999 年 4 月 25 日朝刊広島面，朝日新聞 1999 年 4 月 28 日朝刊岡山面，朝日新聞 1999 年 5 月 12 日朝刊香川面による。

成した「しまなみ交流館」や係留中のクルーズ船内に作られた映画館で新尾道三部作の三作目となった映画『あの、夏の日』が上映されたことⁱⁱ、また、しまなみ海道の開通をうけて変化した尾道について大林監督がたびたび講演会で開発志向の現代の風潮に異議を申し立てていたことが記事となっていたⁱⁱⁱ。そのほかには尾道で撮影されたドラマや映画について^{iv}や、「瀬戸内しまなみ海道国際スリーデーウオーク」でコースに組み込まれた尾道水道の「渡し」が人気を博したこと^vなどが記されている。

2つ目のピークである2002年には、47件のうち尾道三部作や映画、大林監督と関係がある記事が12件だった。それぞれの記事で特に繋がりは見られず、最も多くみられたのは、「小津映画の世界」という4件の特集であった^{vi}。『東京物語』の監督である小津安二郎は、題名に東京とつけたのが5本あり、生涯で制作した54本のうち東京が舞台の作品は49本に上る。『東京物語』で尾道でも撮影を行ったのは、小津監督が信仰に似た敬慕

ⁱⁱ朝日新聞 1999年4月28日朝刊岡山面，朝日新聞 1999年4月27日朝刊広島面，朝日新聞 1999年5月1日朝刊広島面，朝日新聞 1999年5月11日朝刊1社面による。

ⁱⁱⁱ朝日新聞 1999年12月10日朝刊広島面による。

^{iv}朝日新聞 1999年1月29日朝刊広島面，朝日新聞 1999年6月30日夕刊TM1面による。

^v朝日新聞 1999年4月23日朝刊2社面による。

^{vi}朝日新聞 2002年4月25日夕刊らうんじ1面，朝日新聞 2002年7月4日夕刊らうんじ1面，朝日新聞 2002年7月11日夕刊らうんじ1面，朝日新聞 2002年7月18日夕刊らうんじ1面による。

を抱く志賀直哉ゆかりの地であったからだという^{vii}。

3つ目のピークである2006年は、74件のうち尾道三部作や映画、大林監督と関係がある記事は21件だった。そのうち2005年に公開された映画『男たちの大和/YAMATO』のロケセットに関する記事が5件、ヴィム・ヴェンダースの写真展に関する記事が4件、新版『転校生』に関する記事が3件みられた。先述したように、『男たちの大和/YAMATO』のロケセットは映画公開後の2005年7月17日から2006年5月7日まで公開された。当初は3月末までの公開の予定だったが、お花見の時期やゴールデンウィークに多くの観光客が見込まれることから延長が決まった（朝日新聞2006年2月7日朝刊広島1・1地方面）。これに関して大林監督は、ロケセット公開を支援する観光行政のあり方について、講演会などの場で繰り返し批判をしていた。大林監督は2006年4月24日の朝日新聞で、「『男たちの大和』という映画がふるさとで撮影されたことは、誇らしく思う。僕の尾道での撮影スタッフも協力した。でもセットは残すためのものじゃない。スクリーンに映し出されて初めてリアリティーを持つ。単なる張りぼては、夢を壊すだけではないか。」と述べている。

4つ目のピークの2010年では、71件のうち6件の記事が尾道三部作や映画、大林監督と関係がみられた。谷口正晃監督による新版『時をかける少女』に関する記事が2件、尾道での撮影会や写真家による授業の記事が2件、スリーデーマーチと読者の意見を載せた記事が1件

^{vii} 朝日新聞2002年7月4日夕刊らうんじ1面による。

ずつであった。残りの 55 件に関しては、各地域の行事の案内に関する記事が大半を占めていた。

5 つ目のピークである 2015 年には、原節子や小津監督に関連のある記事は 5 件みられたが、この年に『東京物語』で主演を演じていた女優原節子が亡くなったことが要因である。尾道三部作や映画、大林監督と関係がある記事は、上記の 5 件を含めて 18 件だった。そのうち上映会や映画祭、ワークショップに関する記事が 4 件、大林監督の映画「花筐」の撮影に関する内容や、大林監督の講演に関する記事が 3 件だった。

大林監督はこれまでに制作してきた映画について、敗戦の経験からの想いを表現していると語った（朝日新聞、2015）。日本は終戦直後の占領政策を経てアメリカを目標に経済発展したが、経済優先の日本に大林監督は危機感を持ち始めた。経済優先の社会はふるさとを「町おこし」の名で壊しているため、この街並みを守ることに役割であると感じ、尾道の古い街並みを舞台にした映画『転校生』などを撮影してきたと語っている。

最後のピークである 2018 年では、尾道三部作や映画、大林監督と関係がある記事は 16 件だった。そのうち大林監督に関する記事が 5 件、尾道映画祭に関する記事が 2 件だった。大林監督に関する記事では、2017 年に公開された『花筐』の上映会^{viii}や、『海辺の映画館—キネマの玉手箱—』の撮影の開始^{ix}、2016 年に余命 3 か

^{viii}朝日新聞 2018 年 2 月 9 日朝刊備後・1 地方面、朝日新聞 2018 年 4 月 14 日朝刊北九・1 地方面による。

^{ix}朝日新聞 2018 年 7 月 2 日朝刊 2 社会面、朝日新聞 2018 年 7 月 3 日朝刊広島 1・1 地方面による。

月と宣告されたことを受けての対談の様子^x，敗戦を経験したゆえの映画制作にかける思い^{xi}などが掲載されている。

ii 記事中の表現

次に，前項でみた記事において使われている表現について検討する。

大林監督を説明する言葉は大きく分けて，①映画監督であること，②尾道出身であること，③作品に関すること，④その他の4つに分類される。①は「映画監督の大林宣彦監督」や「大林宣彦監督」，②は「尾道出身の大林宣彦監督」や「この街（尾道）で生まれ育った大林さん」，③は「尾道を舞台にした大林宣彦監督」や「『尾道三部作』で有名な大林宣彦監督」といった表現が含まれる。④には，「大林宣彦」，「『映像の魔術師』といわれる大林宣彦さん」，「がん闘病中の大林宣彦さん」の3つの表現が含まれる。また，「『時をかける少女』『さびしんぼう』など10代の内面を，叙情豊かに描く映画づくりで知られる大林宣彦監督」，「唐津を舞台にした映画『花がたみ』を長年温めてきた大林宣彦監督」という2つの表現は，作品名のほかに別の内容が含まれているため，③と④の両方に分類する。さらに，「広島県尾道市出身の映像作家でがん闘病中の大林宣彦さん」の表現については，出身地に加え，がん闘病中であるという内容が含まれているため，②と④の両方に分類する。それぞれの

^x朝日新聞 2018年2月9日週刊朝日面による。

^{xi}朝日新聞 2018年5月26日付朝刊週末be・b06面による。

分類では，①は 33 個，②は 16 個，③は 18 個，④は 5 個の表現がみられる。各年における大林監督の形容詞的表現は表 3 のとおりである。

次に尾道の説明の中で，文学の街や映画の街，もしくはそれに近い表現¹⁰⁾について検討する。1985 年から 2018 年の記事において初めて当該表現が現われるのは，1993 年の「山と海の街」である。その後，1999 年に「坂道やお寺，港，渡船」，「文学や映画」，「坂の町」，「文学」，「坂の街」，2002 年に「坂と海の町」，2006 年に「文学のまち」「映画のまち」「坂のまち」，「石段の坂道の街」，「商港，造船の街」，2010 年に「坂や古い寺などの町並み」，「坂の町」，2015 年に「港町の尾道」，「映画の街」，「坂の町」，「映画の街」，2018 年に「映画のまち」，「坂の町」，「坂と猫の街」という表現がされるようになった。特に多くみられたのは，「坂」で 11 個，次に多くみられたのは「映画」で 5 個である。

また，尾道に訪れる人々や尾道のファンの数に言及している表現は表 4 のとおりである。表 4 は，1985 年から 1995 年までは「尾道&映画」を含む記事が 1 件以上みられた年度の記事，1996 年から 2018 年については第 III 章の第 1 節で分類した 6 つのピークの年度の記事を抽出している。「尾道&映画」を含む記事はみられるが，尾道の観光客やファンの増加に関する表現がみられない 1985 年，1993 年，1994 年，2006 年，2010 年は空白としている。尾道に訪れる人々や尾道のファンの数に言及している表現を含む 7 件の記事のうち，「尾道三部作」によって尾道のファンが増えた，「尾道三部作」のファンが多いという表現が 5 件，外国人観光客が増加したと

いう表現が2件みられた。

表 3 各年における大林監督の形容詞的表現 ¹¹⁾

西暦	大林宣彦の説明	西暦	大林宣彦の説明	西暦	大林宣彦の説明
1985	広島県尾道市出身の映画監督大林宣彦さん	2002	映画監督の大林宣彦さん	2015	映画「野のなななのか」の大林宣彦監督
	大林宣彦		大林宣彦監督		映画監督の大林宣彦さん
1991	尾道出身の大林宣彦監督		大林宣彦監督	尾道三部作などで知られる大林宣彦監督	
	大林宣彦監督		大林宣彦監督	監督の大林宣彦さん 大林宣彦監督	
1993			映画監督大林宣彦さん	大林監督	
1994	映画監督の大林宣彦氏		同市出身の映画監督、大林宣彦さん	尾道三部作などで知られる大林宣彦監督	
	映画監督の大林宣彦さん		大林宣彦監督	大林宣彦監督	
	尾道出身の大林宣彦監督		尾道出身の映画監督・大林宣彦さん	大林宣彦監督	
1995	映画監督の大林宣彦さん		大林宣彦監督	地元出身の大林宣彦監督	
	尾道を舞台にした大林宣彦監督		尾道出身の大林宣彦監督	映画監督の大林宣彦さん	
	尾道を舞台にした大林宣彦監督	「尾道三部作」で有名な大林宣彦監督	「時をかける少女」「さびしんぼう」など10代の内面を、叙情豊かに描く映画づくりで知られる大林宣彦監督 大林監督		
	尾道を舞台にした大林宣彦監督	映画監督の大林宣彦さん	唐津を舞台にした映画「花かたみ」を長年温めてきた大林宣彦監督 尾道3部作で知られる大林監督		
	瀬戸内を舞台にした大林宣彦監督	大林宣彦監督	映画監督・大林宣彦さん		
1999	尾道を舞台とした大林宣彦監督	2010	大林宣彦監督	映画監督・大林宣彦さん	
	大林宣彦監督		大林宣彦監督	尾道出身の大林宣彦監督	
	尾道を題材にした映画で知られる大林宣彦監督		大林宣彦監督	映画作家の大林宣彦さん	
	尾道を舞台にした大林宣彦監督			尾道市出身の映画作家、大林宣彦さん	
	広島県尾道市出身の大林宣彦映画監督			大林宣彦監督	
	尾道ゆかりの大林宣彦監督			大林宣彦監督	
	大林宣彦監督			映画監督の大林宣彦さん 「映像の魔術師」といわれる大林宣彦さん	
	大林宣彦監督			映画監督・大林宣彦さん	
	尾道を舞台にした大林宣彦監督			映画監督の大林宣彦さん	
	尾道出身の映画監督大林宣彦さん			広島県尾道市出身の映画作家でがん闘病中の大林宣彦さん 尾道市出身の映画作家、大林宣彦さん	
映画監督の大林宣彦氏			大林宣彦監督		
この街で生まれ育った大林さん					
尾道出身の映画監督大林宣彦さん					

出典：1985年から2018年の『聞像Ⅱ』第一群
の記事から筆者作成

表 4 尾道の観光客やファンの増加に関する各年の記述

西暦	尾道の観光客やファンについて
1985	
1991	大島氏は人口9万人の広島県尾道市に年間220万人の観光客が訪れる例を引き、「その中には、尾道出身の大林宣彦監督が同市を舞台に撮った一連の映画を見たファンが多いと聞く。」
1993	
1994	
1995	尾道を舞台にした大林宣彦監督の映画で尾道ファンが増えた。
1999	尾道三部作は熱烈なファンを生んだ。
2002	FCではなかったが、尾道が「転校生」など大林宣彦監督の映画の舞台になり、観光客が激増した。
2006	
2010	
2015	原田とともに伝説になったのが尾道の街だ。「転校生」の舞台になって注目された土地が、「時をかける少女」のヒットで、訪れるファンを一気に増やした。
2018	尾道の街は10代の若者や外国人観光客にも人気が高まり、シネマ尾道を開館した10年前には想像できなかったような、年中にぎやかな風景が、今ではすっかり日常の景色になりました。「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市」として日本遺産に認定され、尾道を訪れる観光客が増えている。

出典：1985年から2018年の『聞像Ⅱ』第一群の記事から筆者作成

3) 尾道のイメージ形成と維持

以上を踏まえて、前節の第i項や第ii項で検討した新聞記事の数の推移や内容から、尾道のイメージの形成や維持について考察していく。

第Ⅱ章の第1節で、尾道に関して坂や寺といったイメージは、かつてから存在しており、近年では「映画の街」としても知られるようになったと述べた。表2からわかるように、実際、尾道における寺や坂に関する記事は明治や大正から多くみられており、戦前から尾道は「寺」や「坂」といったイメージと深い結びつきがあるといえる。その一方で、表2において「尾道&映画」というキ

ワードを含む記事が、1879年から1999年の『聞像Ⅱ』第二群に比べて1985年以降の『聞像Ⅱ』第一群では大幅に増えたことから、1985年以降から特に「映画」というイメージがもたれるようになったと考えられる。

また尾道では、豪商の寄進で尾道三山の山腹には大小81の寺が建てられ、また、彼らの別荘もつくられて現在のような急峻な斜面に住居が密集する町が形成された（足達他，1998）。その結果、南に海を望み、狭い坂道と多くの寺院と石垣の住宅でつくられたこの環境は、独特の景観を構成し文人墨客の好むところとなった。特に「坂」を含む記事数がほかのキーワードと比較して多くなっているのは、戦災による被害を免れ、その景観を維持していることがひとつの要因であると推測される。

さらに、1985年から2018年にかけて「尾道&映画」を見出し、内容に含む記事数の推移から、「尾道＝映画」というイメージの形成過程について考察する。

シネマツーリズムの萌芽となった「尾道三部作」は1982年から1985年にかけて公開された映画であるが、図1でみられるように、「尾道&映画」を含む記事が大きく増加し始めるのは1995年以降である。1995年は「新尾道三部作」の二作目となる『あした』が公開された年である。「尾道三部作」がヒットしたことにより、同監督が制作した「新尾道三部作」が注目されるようになったことで、記事の増加がみられたと考えられる。しかしこの時期は、「尾道三部作」が公開されてから10年ほどが経過している。「尾道三部作」の2作目となる『時をかける少女』が興行収入28億円を記録したにもかかわらず、「尾道三部作」の公開年度付近での記事数が少な

い。これは、映画公開直後ではなく後付けで「尾道」と「映画」が結び付けられるようになったからであると考えられる。実際、朝日新聞において尾道が初めて「映画の街」と表現されたのは1997年であり、「映画の街 変化する風景に寂しさ」という見出しの記事である。記事では、1982年に公開された『転校生』で描かれた尾道の町の様子とは大きく変化してしまったと記されており、「尾道三部作」が「映画の街」というイメージを創り出したことを間接的に表現していると考えられる。さらに1999年以降では、各年で「映画 尾道」を含む記事の数に大きな差が見られる。世間での尾道に対する映画のイメージが薄れた頃に再び記事が増加することで、そのイメージがより強く印象付けられ、維持されていると考えられる。

次に、記事の内容から尾道が「映画の街」と呼ばれるようになった経緯を考察する。前節の第i項からわかるように、ピーク時における新聞記事はそれぞれの年代で起こった出来事が反映されており、その内容は各年で偏りがみられた。しかし、1985年から1995年にみられた尾道三部作や映画、大林監督と関係する16件の記事のうち、9件が「尾道三部作」や「新尾道三部作」の作品の撮影、内容、受賞、ロケ地ガイドブックに関する内容であった。それ以降の年代において「尾道三部作」や「新尾道三部作」の映画そのものに触れられている記事はなく、「尾道三部作」の一作目である『転校生』が公開された1982年から1995年の13年間の間、大林監督の「尾道三部作」および「新尾道三部作」が世間で関心を持たれていたことがわかる。また表4からわかるように尾道

への観光客の増加は「尾道三部作」も一因となっており、実際の世間の注目度も高かったといえる。

「尾道三部作」および「新尾道三部作」に関する記事は1995年までしかみられなかったが、2006年と2015年には大林監督の説明として「尾道三部作」が用いられており、世間での「大林宣彦＝『尾道三部作』の監督」というイメージが強い。また、大林監督が尾道出身であるという表現は時代を問わず頻繁に用いられており、大林監督が尾道出身であるという認識も強いといえる。

和田（2017）は、尾道市で映画の撮影がいくつも行われてきたこと、さらにフィルム・ツーリズムの動きが全国に先駆けてみられるようになったことが、尾道が「映画の街」と呼ばれるようになった理由であるとしている。それに加えて、長い期間にわたって人々の関心を集めてきた映画「尾道三部作」が、大林監督によって出身地である尾道で制作されたことも、尾道に「映画」というイメージを確立した一つの要因となったと考えられる。

ところが、そのようなイメージが形成されたにも関わらず、尾道市内に映画館が1館もない時期があった。2007年11月6日の朝日新聞の記事によると、最盛期の1960～1970年代には10館あった映画館も、2001年に尾道市内で最後となる映画館、尾道松竹が閉館してしまった。「映画の街」として知られているが映画館がない、という状況を受けて、2004年からNPO法人シネマ尾道（尾道に映画館をつくる会）が寄付を募り、2008年に旧尾道松竹を改装してシネマ尾道を開館した。年間約120本の新旧の洋画邦画を上映し、尾道の映画文化を守るために現在も経営を続けている（シネマ尾道ウェブサ

イト「アバウト」)。2017年3月12日の朝日新聞の記事によると、「映画の街・尾道」の魅力を発信していくことを狙いとして、2017年3月18、19日に第1回目の尾道映画祭がシネマ尾道で開催された。大学生自主制作作品のほか、5作品が上映された。また、シネマ尾道では映画の上映だけでなく、映画ワークショップや映画教室、アニメ教室など、映画に関する催しが数多く開かれている（シネマ尾道ウェブサイト「映画ワークショップ」）。図1の新聞記事数の推移をみると、2000年ごろから「尾道&映画」に関する記事は減少し、2002年に一度その数はピークを迎えるものの、他のピーク時に比べてその増加量は少ない。しかしNPO法人シネマ尾道が寄付を募り始めた2004年には記事の増加がみられることから、尾道市の映画館の有無や映画に関連するイベントの開催などが新聞記事の数に少なからず反映されていることがわかる。映画の制作だけでなく、映画に関連した出来事も尾道のイメージの維持に影響していると推測される。

IV 「尾道三部作」がもたらした変化と今

これまでは尾道が「映画の街」と呼ばれるようになった要因や経緯、時期について考察してきた。では、そのイメージの形成が尾道にどのような変化をもたらし、現在はどのような場所になっているのだろうか。本章では尾道における変化と現状について、観光とFCの活動などから検討する。

1) 観光

1980年から2016年までの尾道市への入込観光客数

(図2)をみると、1980年から1991年まで増加、1992年から1998年まで微減し、1999年に激増した後2002年までは減少し、2003年から2016年までは再び増加している。このように増加と減少を繰り返しながら、尾道の観光客はおよそ40年間で158万人(1980年)から369万人(2016年)へと倍以上に増加した。1890年から1991年までは、「尾道三部作」のヒットによって尾道が「映画の街」であるという認知度が高まり(石黒, 2016)、観光客数の増加に結び付いた¹²⁾。「尾道三部作」の公開を機にロケ地を巡るという観光形態が現れ、尾道市はおのみちロケ地案内図¹³⁾やロケMAP¹⁴⁾を作成し、観光客に配布した。さらに1995年には、大林映画の製作会社によって、新旧の尾道三部作5作¹⁵⁾に登場したロケ地やこぼれ話を掲載した映画ガイドブック『a movie book「尾道」』が出版された。1995年9月30日の朝日新聞の記事によると、尾道大林宣彦映画研究会事務局は、このガイドブックは尾道のロケ地巡りに欠かせない一冊だと話していたという。以上から、多くの観光客にとって、ロケ地巡りが尾道を訪れる目的の一つとなっていたと考えられる。

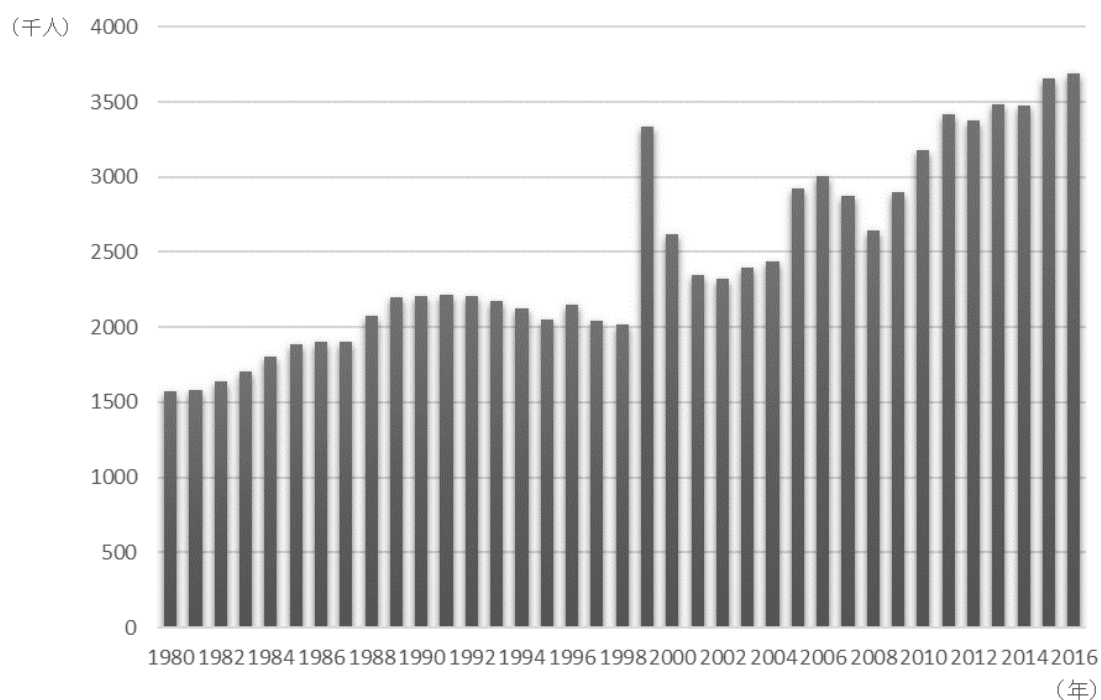


図 2 尾道市における入込観光客数の推移（1980-2016）

出典：尾道市資料¹⁶⁾より筆者作成

しかし、現在尾道で発行されている観光ガイドは大きく内容が変化している。尾道観光協会のホームページでは、尾道エリアの観光情報の pdf ファイルが無料でダウンロードできるようになっているが、マップ関連の資料の中にロケ地巡りの参考となるものはみられない。「おのみちラーメンマップ」や「尾道ぐるめマップ」、「御調町飲食店マップ 2017」といった食に関するマップや、各地域の観光案内図のほか、「おのみち散歩・散走マップ」、「しまなみ海道サイクリングマップ」などが掲載されている。また石黒（2016）は、日本の大都市圏の旅行会社が企画する旅行商品を分析し、どの都市圏の旅行会社においても尾道市を目的地としたものはほとんどなく、「まちあるき」や「古い町並み」といったイメージ

は強くないことを明らかにした。さらに尾道と結合すると考えられるデスティネーションについて尾道のイメージを分析した結果，現在の尾道は「広島と岡山に挟まれた瀬戸内海沿岸の一目的地に過ぎず，『しまなみ海道』と『ラーメン』，わずかに残るドラマのロケ地としてのイメージが混在した」場所であると述べている（石黒）。

2) フィルムコミッション

ジャパン・フィルムコミッション事務局によると，FCの始まりは1969年のアメリカ，コロラド州政府が設立した「コロラド・フィルムコミッション」である。1975年にAFCI（Association of Film Commissioners International＝国際フィルムコミッショナーズ協会）が設立されて以降，世界各国で次々にFCが誕生し，2000年には日本初となるFCとして大阪ロケーション・サービス協議会が発足した。しかし，尾道ではそれでは以前からFCのような支援を行っていた。初めは尾道市の観光課や尾道市民が映画製作に協力していたが，地元ファンによって1995年に「尾道大林宣彦映画研究会」が結成され，エキストラ集めや撮影の手伝い，チケット販売などのサポートを行うようになった（朝日新聞1996年3月7日朝刊広島面）。研究会の結成から8年後に「おのみちフィルム・コミッション」が設立されたが，その活動内容は撮影候補地の情報の提供，宿泊施設の紹介，エキストラ等の募集の手伝いなど，研究会が行っていた活動の延長となるものであった（おのみちフィルムコミッション，2011）。大阪ロケーション・サービス協議会の発足と同じ頃に，民間による任意の「フィルム・コミ

ッション設立研究会」が設立され、日本映画を国際化していこうという動きがみられた。この動きは、発足当初からマスコミに大きく取り上げられ、研究会の予想をはるかに上回る早さで全国の地方自治体の間に「地方フィルム・コミッション」設立の動きが広まっていった。その後、全国組織が必要となり、2001年に「全国フィルム・コミッション連絡協議会」が設立された。設立当初、協議会に加盟していたFCは11団体にとどまっていたが（前澤，2008）、2009年に「全国フィルム・コミッション連結協議会」から「特定非営利法人ジャパン・フィルムコミッション」への移行を経て、2018年8月3日の時点では109団体が加盟している（ジャパン・フィルムコミッション，2009）。

尾道市の資料によると、おのみちフィルムコミッションはFC設立による短期的な効果として、ロケ隊の宿泊や食事代、機材購入、タクシー・レンタカー借り上げなどの直接的経費や街の賑わいの創出、地元住民の盛り上がりなどを挙げている。長期的な効果としては、街や地域の知名度向上や観光集客力強化、新ビジネスの創出チャンス拡大、映像文化、芸術の振興、住民の「我がまち」意識の高揚を挙げている。「おのみちフィルムコミッション」が特に重視しているのは、住民への還元であり、尾道に住むことへの誇りを感じ、定住につなげたいと考えている。そういった思いから「おのみちフィルムコミッション」は、映像を通じてまちのイメージアップを図るため、映画だけでなくテレビやCMなどの映像制作に関する各種サービスを提供している。2016年度の支援実績では、全体の実績である86件のうち映画やプロモー

ションは3件であったが、特に数が多くみられた情報・バラエティ番組は41件にのぼっている。「映画の街」と呼ばれている尾道であるが、近年では映画よりもテレビ番組において多く取り上げられている。

3) 「尾道三部作」公開後から現在までの変化

以上から、「尾道三部作」がもたらした変化は以下の2点が挙げられる。まず、「尾道三部作」の公開によって尾道を訪れる観光客が倍増し、その目的としてロケ地巡りという観光形態が顕著になった。花岡・西山(2016)は、近世の日本において尾道は観光地として捉えられておらず、尾道と観光が結び付けられるようになったのは明治、大正時代からだとしている。また、近代に入り小説や映画で取り上げられるにつれて、徐々に観光地としての認知度が上がっていったと述べている。観光客数の増加や「尾道三部作」の興行収入、話題性といった点から、「尾道三部作」が尾道を観光の場としての認識の定着に大きく寄与していたと考えられる。2つ目の変化は、「尾道三部作」の制作が日本におけるFCの拡大を促したことである。映画の制作において、ロケ地の地元民との協力が主流ではなかった時期に大林監督はすでに地元と連携し、ヒット作を生み出した。「尾道三部作」が話題にならなければ、この手法も着目されることはなく、日本におけるFCの拡大はもっと遅れていたかもしれない。

ところが現在の尾道においては、「映画の街」と呼ばれているにも関わらず、世間では映画のロケ地としての尾道というイメージが薄れてきている。観光の目的がし

まなみ海道やラーメンなどへ移行しているほか、メディアで取り上げられる際の媒体として、全体の媒体のうちおよそ半数がテレビ番組となっており、映画を大きく上回っている。実際の尾道での観光行動やFCの取り組みが新聞記事での「映画の街」という表現とは異なっていることが明らかになった。

このように、「尾道三部作」は「映画の街」というイメージの形成や観光形態、FCの拡大に大きな影響を及ぼしてきたものの、現在の尾道においては「尾道三部作」が与える影響は小さくなっているとえるだろう。

V おわりに

本研究では、新聞記事における尾道や映画に関する記事の数、その内容を通して尾道におけるイメージを考察し、そのイメージによる尾道の変化について検討してきた。1982年から1985年にかけて「尾道三部作」の三作品が公開されたことを受けて、尾道は「映画の街」と呼ばれるようになったが、朝日新聞において尾道が「映画の街」と表現されるようになったのは公開からおよそ10年が経過してからであり、イメージの後付けが行われていたことが明らかになった。また、「尾道三部作」の公開後の尾道では観光客の増加や、ロケ地巡りという観光形態が見られたが、現在では訪れる人々の目的が大きく変化していたことや、FCの設立の経緯、取り組みなど、現在の尾道市についてもみることができた。

本稿では、新聞というメディアにおける尾道の捉えられ方を論じたが、メディアは新聞だけにとどまらず、テレビや書籍など様々な媒体を通じて世間のイメージを

反映，生み出しているため，他の媒体における尾道の表現の検討・比較までに至らなかったことが課題として挙げられる。また，尾道にはFCだけでなく観光協会や商工会議所といった団体もあり，それらの団体での取り組みの変化や想いについても目を向けていくべきだろう。尾道におけるイメージが今後どのように変化し，尾道や全国にどのように影響を与えていくのかを注目していきたい。

謝辞

本論文を執筆するにあたり，尾道市役所の皆様には大変お世話になりました。お忙しい中，丁寧に質問に答えてくださり，誠にありがとうございました。また，テーマを決める段階から執筆に至るまで山崎孝史教授には大変お世話になりました。末筆ではありますが，ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

注

- 1) 永治(1992)によると，シネマトグラフは撮影・映写装置のことであり，当時の特許証書には「分割写真のプリントを作り，かつ見せるための新しい器械」と記されている。
- 2) 藤田(2013)によると，キネトスコープを開発したエディソンはその名称について明確な区別を設けており，撮影装置を「キネトグラフ」，鑑賞装置を

「キネトスコープ」と呼び、それらを総称した全体として、同じく「キネトスコープ」と呼ぶと述べている。

- 3) 1991年公開の『ふたり』, 1995年公開の『あした』, 1999年公開の『あの、夏の日～とんでろじいちゃん』の三作品を指す。
- 4) 別府大学附属図書館の書誌情報によると、『A movie book 「尾道」』は大林監督が監修したガイドブックで、1959年9月に出版されている。
- 5) 尾道市資料とは、2018年2月に筆者が尾道市役所へ聞き取りに伺った際にいただいた「おのみちフィルムコミッション」についての資料である。
- 6) 同上
- 7) キネマ旬報社(2012)によると、キネマ旬報賞の始まりは、当時の編集同人の投票集計によって1924年のベスト・テンを選定したときである。当初は<芸術的に最も優れた映画><娯楽的に最も優れた映画>の2部門(外国映画のみ)であったが、1926年、日本映画の水準が上がったのを機に、現行と同様の<日本映画><外国映画>の2部門に分けたベスト・テンに変更された。
- 8) 朝日新聞社によると、『聞像Ⅱ』第一群に収録されている内容は以下のとおりである。朝日新聞本紙(朝刊・夕刊)最終版には、1984年8月以降の東京本社版ニュース面、1989年2月以降の大阪本社

版ニュース面，1989年4月以降の西部・名古屋版
ニュース面，1988年4月以降の家庭・文化・読書
面（東京本社版のみ），1988年5月以降の芸能面（東
京本社版のみ），1993年1月以降のスポーツ面・日
曜版，1995年5月以降の短歌・俳句，1996年4月
以降の家庭・学芸・芸能・文化（大阪本社版），1998
年12月以降の夕刊マリオン，1999年3月以降の家
庭・学芸・芸能・文化（西部・名古屋本社版），1999
年6月15日以降の北海道支社版ニュース面，2002
年4月以降のbe，2005年4月以降の囲碁・将棋，
2005年8月以降のテレビ・ラジオ面のコラム，投
書，2008年10月以降のグローブが収録されている。
朝日新聞地域面には，1988年6月以降の東京・神
奈川・千葉・埼玉・茨城・群馬・栃木，1990年11
月以降の大阪・京都・兵庫・奈良，1993年10月以
降の静岡・山梨・宮城，1993年11月以降の広島・
岡山・福岡，1994年1月以降愛知，1997年1月以
降沖縄以外の全都道府県，2000年4月以降の多摩，
2001年4月以降の東京川の手，2004年4月以降の
むさしの，2009年10月以降の県庁所在地以外の地
域面（茨城・埼玉・千葉・神奈川・愛知・三重・京
都・奈良・大阪・兵庫・広島・山口・福岡），2010
年2月以降の県庁所在地以外の地域面（山形・福
島・長野・静岡・島根・長崎）が収録されている。
朝日新聞デジタルには2011年5月以降の一部の独
自コラム・連載記事，AERAには1988年5月24日
発行の創刊号以降の記事，週刊朝日には2000年4
月以降のニュース記事がそれぞれ収録されている。

- 9) 朝日新聞社によると、『聞像Ⅱ』第一群には1879年1月25日(創刊号)～1926年12月の大阪紙面及び1888年7月10日(創刊号)～1926年12月の東京紙面が収録されている。
- 10) 「文学や映画と並んで尾道が『演劇のまち』と言われるようになれば」(朝日新聞1999年6月11日朝刊広島面)や「文学や映画の舞台」(朝日新聞2010年5月1日朝刊淡路・2地方面)といった表現のことを指す。
- 11) 1985年から1995年までは「尾道映画」を含む記事が1件以上みられた年度の記事,1996年から2018年については第Ⅲ章の第1節で分類した6つのピークの年度の記事を抽出している。1993年は「尾道映画」を含む記事はみられたが,大林監督の形容詞的表現はみられなかったため,空白としている。
- 12) 尾道観光協会のホームページでは,尾道観光に関わる出来事として,『転校生』公開を記している。
- 13) 「尾道三部作」のロケ地がイラスト付きで紹介されている。各作品のあらすじや大林監督の思いも記されている。
- 14) 「新尾道三部作」のロケ地がイラスト付きで紹介されている。各作品のあらすじや大林監督の紹介も掲載されている。
- 15) 「新尾道三部作」の三作品目となる『あの,夏の日～とんでろじいちゃん』は1999年に公開されたため,ガイドブックの販売以前に公開された五作品を指す。
- 16) 尾道市資料とは,2018年2月に筆者が尾道市役所

へ聞き取りに伺った際にいただいた尾道市観光客数の推移についての資料である。

参考文献

足達富士夫・巽和夫・松本静夫・西川龍也・上谷芳昭
(1998) : 「丘陵斜面郡市の居住環境と景観整備の研究 : 坂の町尾道の場合」, 住宅総合研究財団研究年報
(24), 117-126 頁

石黒侑介 (2016) : 「『尾道』の仕掛け : 『尾道』の観光をとりまく環境」, CATS 業書 (10), 91-100 頁

キネマ旬報社 (2012) : 「かつての 8 ミリ少年の純粹に映画的な想いを込めて : この小説は尾道で映画化しなければ」, キネマ旬報ベスト・テン 85 回全史 : 1924→2011,
1251-1253 頁

木村めぐみ (2010) : 「フィルムツーリズムからロケーションツーリズムへ : メディアが生み出した新たな文化」, メディアと社会 (2), 113-128 頁

筒井隆志 (2013) : 「コンテンツツーリズムの新たな方向性 : 地域活性化の手法として」, 経済のプリズム
(110), 10-24 頁

手島廉幸 (2008) : 「マスツーリズムの歴史的変遷と今後の行方 : マスツーリズムに終焉はない」, 日本国際観光学会論文集 (15), 11-17 頁

永治日出雄 (1992) : 「映画の創出とルイ・リュミエール〈その 1〉 : シネマトグラフの発明から学術的な集会での公開まで」, 愛知教育大学研究報告・人文科学 (41),
89-100 頁

西井亨 (2016) : 「日本遺産と尾道市民遺産 : 尾道市の

- 歴史まちづくり」, CATS 叢書 (10), 23-28 頁
- 花岡拓郎・西山徳明 (2016): 「『尾道』の気付き : 文化遺産『尾道』の源流と今」, CATS 叢書 (10), 75-90 頁
- 藤田純一 (2015): 「エディソンのキネトスコープ / キネトグラフ開発過程の一次資料に基づく研究 - エディソンが映画に求めたもの」, 1-199 頁
- 前澤哲爾 (2008): 「フィルムコミッションによる地域活性化の可能性」, 月刊自治研 (50), 42-48 頁
- 安田亘宏 (2015): 「日本のシネマツーリズムの変遷と現状」, 西武文理大学サービス経営学部研究紀要 (26), 65-84 頁
- 和田崇 (2017): 「『映画のまち・尾道』の認知度と観光行動 : ロケ地観光の持続可能性」, 県立広島大学経営情報学部論集 (10), 101-114 頁

参考記事

- 「未公開の大林作品を9日上映 監督自ら出演 尾道の研究会」朝日新聞 1996年3月7日朝刊広島面
- 「映画の街 変化する風景に寂しき(クローズアップ尾道: 2) / 広島」朝日新聞 1997年6月26日朝刊広島面
- 「新尾道大橋の橋名碑が完成 しまなみ海道起点 / 高知」朝日新聞 1999年4月25日朝刊高知面
- 「新尾道大橋の橋名碑が完成(「しまなみ」開通 あと6日) / 広島」朝日新聞 1999年4月25日朝刊広島面
- 「『しまなみ海道』開通, あと3日 / 岡山」朝日新聞

- 1999年4月28日朝刊岡山面
- 「ちょっとユニーク 新尾道大橋の橋名碑が完成 / 香川」朝日新聞 1999年5月12日朝刊香川面
- 「交流館公開, 30日に記念式(「しまなみ」開通あと4日) / 広島」朝日新聞 1999年4月27日朝刊広島面
- 「出会い・別れ・希望乗せ しまなみ海道, きょう開通 / 広島」朝日新聞 1999年5月1日朝刊広島面
- 「広島・尾道市に船内映画館が誕生(青鉛筆) 【大阪】」朝日新聞 1999年5月11日朝刊1社面
- 「しまなみ海道開通 安らぐ観光(風99 取材ノートから) / 広島」朝日新聞 1999年12月10日朝刊広島面
- 「テレビ新広島『こいまち』 尾道舞台(メディアナウ) / 広島」朝日新聞 1999年1月29日朝刊広島面
- 「あの, 夏の日 坂道と記憶の深い関係(シネマのみかた) 【名古屋】」1999年6月30日夕刊TM1面
- 「『渡し』に揺られて尾道情緒を 国際スリーデーウォーク 【大阪*】」朝日新聞 1999年4月23日朝刊2社面
- 「プロ・アマの12劇団競演 しまなみ交流館で尾道演劇祭 / 広島」朝日新聞 1999年6月11日朝刊広島面
- 「師匠が勧めた『原節子』(歩く 小津映画の世界・春: 4)」朝日新聞 2002年4月25日夕刊らうんじ1面
- 「無常の生, ここに始まる(歩く 小津映画の世界・夏: 上)」朝日新聞 2002年7月4日夕刊らうんじ1面
- 「坂と海の町, ロケにわく(歩く 小津映画の世界・夏: 中)」朝日新聞 2002年7月11日夕刊らうんじ1面

- 「淡く深く，いつも新しく（歩く 小津映画の世界・夏：下）」朝日新聞 2002年7月18日夕刊らうんじ1面
- 「『大和』ロケセット，5月7日まで公開 入場者多く 期間延長 尾道／広島県」朝日新聞 2006年2月7日 朝刊広島1・1地方面
- 「大林宣彦監督，尾道市をしかる 戦艦大和ロケセット 公開『ふるさとを商売に』」朝日新聞 2006年4月24日夕刊1社会面
- 「長野版『転校生』に意欲 大林監督，撮影前に県庁訪問／長野県」朝日新聞 2006年10月18日朝刊長野東北信・1地方面
- 「＜お知らせ＞全日写連だより 尾道の町並みを写す会 参加者を募集／兵庫県」朝日新聞 2010年5月1日朝刊淡路・2地方面
- 「『唐津の秘密の場所，教えて』 大林監督，映画ロケハンで市長訪問／佐賀県」朝日新聞 2015年9月26日朝刊佐賀全県・1地方面
- 「シネマの街，魅力発信 18・19日，尾道映画祭初開催／広島県」朝日新聞 2017年3月12日朝刊備後・1地方面
- 「大林監督，語る 新旧8作品，上映後に登壇 尾道映画祭，23日から／広島県」朝日新聞 2018年2月9日朝刊備後・1地方面
- 「『花筐』見て語って味わって 大林監督作品，小倉昭和館できょうから上映／福岡県」朝日新聞 2018年4月14日朝刊北九・1地方面
- 「戦争と核，語り継ぐ夏 原爆テーマ，広島で映画撮影【大坂】」朝日新聞 2018年7月2日朝刊2社会面

「大林監督，故郷で20年ぶりロケ 「海辺の映画館—キネマの玉手箱—」撮影開始／広島県」朝日新聞 2018年7月3日朝刊広島1・1地方面

「がんサバイバー特別対談 映画作家・大林宣彦さん×日本対がん協会会長・垣添忠生さん」朝日新聞 2018年2月9日週刊週刊朝日面

「(みちのものがたり) 大林宣彦監督が歩いた道 広島県尾道市 敗戦少年の痛みを背負って」朝日新聞 2018年5月26日付朝刊週末be・b06面

参照ウェブサイト

朝日新聞社：「聞蔵Ⅱビジュアルの使い方」

<http://database.asahi.com/help/jpn/help.html> (最終閲覧日 2019年1月14日)

一般社団法人日本映画製作者連盟 (2018)：「映連データベース」

<http://db.eiren.org/> (最終閲覧日 2019年1月14日)

一般社団法人日本映画製作者連盟 (2018)：「日本映画産業統計」

<http://www.eiren.org/toukei/1983.html> (最終閲覧日 2019年1月14日)

尾道観光協会：「尾道の歴史」

<https://www.ononavi.jp/fan/history/> (最終閲覧日：2019年1月11日)

おのみちフィルムコミッション (2011)：「おのみちフィルム・コミッションとは」

<http://www.onomichi-film.jp/detail.php?cat=3> (最終閲覧日 2018年12月27日)

観光庁（2010a）：「ニューツーリズムの概要と観光庁の
施策について」

<http://www.mlit.go.jp/common/000059711.pdf>（最終
閲覧日 2018 年 12 月 20 日）

観光庁（2010b）：「『スクリーンツーリズム促進プロジェ
クト』スタート！」

[http://www.mlit.go.jp/kankocho/news08_000040.ht
ml](http://www.mlit.go.jp/kankocho/news08_000040.html)（最終閲覧日 2018 年 12 月 20 日）

観光庁（2017）：「旅行・観光消費動向調査平成 28 年年
間値（確報）について」

[http://www.mlit.go.jp/kankocho/news02_000312.ht
ml](http://www.mlit.go.jp/kankocho/news02_000312.html)（最終閲覧日 2019 年 1 月 7 日）

キネマ旬報社：「キネマ旬報ベスト・テンとは」

[http://www.kinenote.com/main/kinejun_best10/abo
ut.aspx](http://www.kinenote.com/main/kinejun_best10/about.aspx)（最終閲覧日 2019 年 1 月 9 日）

ジャパン・フィルムコミッション（2009）：「ジャパン・
フィルムコミッションとは」

<http://www.japanfc.org/about/purpose.php>（最終閱
覧日 2019 年 1 月 4 日）

シネマ尾道（2019）：「アバウト」

[http://cinemaonomichi.com/%E3%82%A2%E3%83%90%
E3%82%A6%E3%83%88/](http://cinemaonomichi.com/%E3%82%A2%E3%83%90%E3%82%A6%E3%83%88/)（最終閲覧日 2019 年 1 月 10 日）

シネマ尾道（2019）：「映画ワークショップ」

[http://cinemaonomichi.com/category/%E3%83%AF%
E3%83%BC%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%83%
E3%83%97/](http://cinemaonomichi.com/category/%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%83%E3%83%97/)（最終閲覧日 2019 年 1 月 10 日）

全国フィルム・コミッション連結協議会（2009）：「フィ
ルム・コミッションとは」

<http://www.japanfc.org/film-com090329/about.html>
1 (最終閲覧日 2019 年 1 月 4 日)

東京国際映画祭(2013):「連載企画:【映画祭の重鎮が語る,リアルな映画祭史!】-第1回」

<http://2013.tiff-jp.net/news/ja/?p=17735>(最終閲覧日 2018 年 12 月 20 日)

日本アカデミー賞:「受賞結果一覧」

<https://www.japan-academy-prize.jp/prizes/view.php>
(最終閲覧日 2019 年 1 月 12 日)

別府大学附属図書館:「資料検索」

https://ufinity.beppu-u.ac.jp/?page_id=15 (最終閲覧日 2019 年 2 月 19 日)

本州四国連絡高速道路株式会社:「しまなみ海道とは」

<http://www.jb-honshi.co.jp/shimanami/about/> (最終閲覧日 2018 年 12 月 28 日)

(20,721 字)